

フランス国立図書館所蔵ペリオ将来

敦煌漢文文献目録

Catalogue des manuscrits chinois de Touen-houang

Fonds Pelliot chinois de la Bibliothèque Nationale

第1巻（パリ国立図書館 1970年）序言

マリ＝ロベルト・ギニャール

今枝由郎 訳

I. 発 見

この目録及びその続巻に叙述される敦煌出土漢文文献は、ポール・ペリオ (Paul Pelliot, 1878-1945) の指揮した中央アジア探検隊 (1906-1908) によってパリに将来されたものである。この探検隊は、測り知れない貴重な宝物を我国にもたらした。中国語、チベット語、ソグド語、コータン語、クチャ語、サンスクリット語、ウイグル語で書かれた写本、ヘブライ語の一断片、そして上海及び北京で入手した膨大な漢籍刊本と若干の写本 (分類番号 Fonds Pelliot A 及び B) である。それが、学士院金石芸文部門 (Académie des Inscriptions et Belles-Lettres) の勧告に基づき、文部大臣の決議によって1910年に一括して国立図書館写本部に納められた。ペリオは、漢籍刊本の入手は写本研究に不可欠と考えており、誇らしげにこう述べている。「我々は今までヨーロッパにはなかった漢籍刊本叢書と、中国本土に於いてすら匹敵するものがない漢文写本を蒐集し、国立図書館に将来したのである」(BEFEO, X, 1910, p. 281)。これ以外にも、数々の木彫、ブロンズ、陶器、塑像、絵画等がもたらされ、ルーヴル博物館—その後、ギメ美術館に移されて現在に至っている—の所蔵品に加えられることになった。

ゴビ砂漠と境を接する甘肅省最果ての城砦都市敦煌、その位置に関しては早くからよく知られていた。紀元前100年頃に設置された敦煌郡は、西域に通じる二道（唐代に至っては三道）の出発点であった。敦煌はこうしてインド及び中央アジアに通じる拠点であったため、数世紀にわたって仏教研究の一大中心地となった。陳祚龍『悟真（816-895）の生涯と著作、敦煌文化史への貢献』（*La vie et les oeuvres de Wou-tchen, 816-895, contribution à l'histoire culturelle de Touen-houang*, Paris, 1966）によれば、最初の石窟が開鑿されたのは、紀元353年に遡る。しかしながら、中国文化の色彩が濃いオアシスとして栄えた敦煌は、ウイグル人やチベット人の侵略を蒙る羽目に陥った。チベット人の占領支配は781（或いは787）年から848年とほぼ一世紀にわたった^①。しかし、支配者・被支配者が同一宗教であったため、二ヶ国語教育が組織されることによって、相互の理解にはさしたる困難は伴わなかった。こうした状況の中で、仏教僧が果たした役割は大きかった。チベット語・中国語文献の夥しい数及びその内容からして、地方寺院での教義研究が重要なものであり、又チベット政府の官吏に就こうと志す者向けの学校が開設されていたことが分かる。敦煌では僧尼は全人口中相当な割合を占めており、寺院数は九一十世紀には17に達していた。

この非常に繁栄も、1035年に怒濤の如く押し寄せてきたタングート＝西夏人の侵入によって崩れ去った。寺院の宝物は急遽集められ、敬虔な檀越の発願により開鑿され、彫刻と壁画のほどこされた数百にのぼる石窟の一つの壁に秘蔵窟が穿たれ、宝物はその中に山積され、壁で塞がれた。少なくともペリオはこのように説明している。一方オーレル・スタイン（Aurel Stein, 1862-1943）は、これを「不用となった聖物の捨て場」（“A deposit of sacred waste”, *Serindia*, II, p. 280）と見なしており、日本の藤枝晃氏も同意見である（*The Tun-huang manuscripts, a general description, part I, Memoirs of the Research Institute for Humanistic Studies, Zinbun*, 9, Kyoto, 1966）。これら石窟の名称は、唐代にあっては「莫高窟」であり、今日のように「千仏洞」とは呼ばれていなかった。

いずれにせよ、以後九世紀の間、この閉塞された蔵書窟の存在は全く忘れ去られてしまった。ようやく1899年^②になって、それを塞いでいた粗塗で、装飾のほどこしてあった壁を、王圓録という道士が偶然のことから崩して、発見したのである。中から見つけた古写本は、地方官吏に贈与され、流布し始めた。噂は広まった。ハンガリー系英国人探検家オーレル・スタインが、インド政府及び大英博物館の援助のもとに行った第二回中央アジア探検(1906-1908)の際、外国人としては最初にこの石窟に立ち寄った。彼は発見品の一部——最も貴重なものではないにしても、最も見栄えのするもの——を購入した。彼は考古学者でこそあれ、中国学者ではなかったのである。こうして入手された漢文文献は、1909年1月に大英博物館に納められた。8102点(内6794点は仏教関係)を略述した目録が、リオネル・ジャイルズ(Lionel Giles)氏によって作製された(*Descriptive Catalogue of the Chinese manuscripts from Tun-huang in the British Museum*, London, 1957)。残り約3000点はこの目録には納められておらず、それらの同定作業もまだ終わっていない。

オーレル・スタインによる詳細な探検報告は、二折版の大冊五巻で出版されている(*Serindia, Detailed Report of Explorations in Central Asia and Westernmost China, carried out and described by Aurel Stein*, Oxford, Clarendon Press, 1921)。1952年になって全文献のマикроフィルムが大英博物館から日本に将来された。それに基づいて、ジャイルズ目録よりも更に詳細な分類目録(草稿)が、東京の東洋文庫の敦煌文献研究委員会によって第二冊まで出版されている(『スタイン敦煌文献及び研究文献に引用紹介せられたる西域出土漢文文献分類目録初稿』I, 1964, II, 1967)。この二冊は敦煌及び中央アジア発見の非仏教文献に関するものである。

オーレル・スタイン卿に遅れること一年にして、ポール・ペリオは敦煌に三ヶ月を過ごし、その比類ない中国学の学識によって、蔵書窟の中から最も貴重なものを選び出すことができた。さらに敦煌全体にわたって多くの資料収集も行なった。即ち400近くの窟の中にある碑文や落書きの写し、石碑の拓本、壁画の写真、地方誌の木版刷等々である。1908年3月26日付でポー

ル・ペリオが敦煌からエミール・スナール (Emile Snart) に宛てた手紙が、ペリオの感激、そして発見の重要性を雄弁に物語っている (『甘肅発見の中世蔵書窟』 *Une bibliothèque médiévale retrouvée au Kan-sou.BEFEO*, VIII, 1908, pp. 505-529)。

「かつてスタインが三日間この窟の中で調査し、地方官吏の承認の上で幾つかの文書を正規に購入していった。告解火曜日に当たる3月3日、私はこの至聖なる場所に入ることができた。まったく驚倒した。この蔵書窟からは、8年も前から物が持ち出されているので、もうすっかり数少なくなってしまうと思っていたのだが……。幅・奥行・高さとも各々2m50程の窟、三壁には人の上背よりも高く、卷子が二列、時として三列に積み上げてある。その中に入った時の私の驚嘆を想像してくれたまえ。一隅には紐で二枚の板の間に挟まれたチベット語文献が夥しく積まれているし、他の所では束の端から漢字やチベット文字が見えているのだ。包みを幾つか解いてみた。文書は多くの場合、断片的であり、冒頭或いは末尾が欠けていたり、真ん中が破損していたり、時には題名だけしか残っていない場合もある。しかし読んでみた幾つかの年号はすべて十一世紀以前のものである。又、この最初の調査で早くもブラフミー文字で書かれた貝葉本と、ウイグル語で書かれた数葉が見つかった。私の考えはすぐに決まった。結果がどうしようと、まず蔵書窟全体にわたって、少なくとも簡略な調査が必要であった。そこにある約1万5000から2万に及ぶ書巻を、冒頭から末尾まで広げるてみるわけにはいかなかった。そんなことをしていたら六ヶ月たっても終わらなかっただろう。それでも少なくとも全部開いてみて、一つ一つの文書の内容を確かめねばならなかった。今まで我々が知りもしなかったものがあるかも知れない……。次には二つの部類に分けること。一つは、玉石中の玉、何としても譲り受けねばならないもの。もう一つは、入手すべく努めてはみるものの、だめな場合には諦めるもの。急いだにもかかわらず、この出発段階で三週間以上かかった。最初の10日間は、一日当たり1000巻近くを片

付けた。これはちょっとした記録であろう。窟の中にうずくまって、1時間に100巻ものスピードで見るのだから、まさに文献学者の自動車レースといったところである。それからは速度を緩めた……。ともかくも肝心な点の一つとして忽せにしなかったと思う。一つの巻物として、そればかりか一片の紙切れにいたるまで——そんなほろは、それはもう膨大な量に上るものだったが——私が手にとらなかったものは何一つなかった。そして自分が決めた枠の中にあると思われたものは、何一つとして除外しなかった。こうして、今までに贈物にされてしまったものもあり、又スタインに先を越された後ではあるが、文書の大部分は誰の手にも触れないで閉じられたまま、即ち八世紀以上の昔にここに埋蔵されたままの状態で見い出した」

1908年暮にペリオは探検隊の成果を同行者に委ねてフランスに送り返し、自分はインドシナに滞在した。そして1909年に、首都の学者達に見せる目的で数十点の文書を携えて北京に戻った。神田喜一郎はその著『敦煌学五十年』（東京1960）の中で、当時北京で発行された雑誌記事を引用して、ペリオの離中に先だつ1909年9月4日、高名な学者、官吏十数名が主催したペリオ祝賀会の模様を伝えている。1909年11月以後、東京・大阪の両朝日新聞は敦煌文書の発見を報道し始めた。

ペリオが立ち寄った後、日本の探検隊が続いた（1910-1914）。これは京都の西本願寺の大谷光瑞上人（1867-1947）が、1902年から始めた中央アジア探検隊の第三次派遣であった。その成果として、探検隊は王道士より譲られた4-5000の書巻を1914年に日本に将来した。これらの文献——その大部分は仏教関係——は、諸々の事情から西本願寺の倉の中に忘れ置かれてしまったようだ。1949年になって、再び発見され、西本願寺系の龍谷大学図書館に移された。1950年石濱純太郎氏の発起で、西域文化研究所が創設され、この研究所によって堂々たる二折版六冊の文献目録が出版された（『西域文化研究』I-VI、京都、1958-63）。〔一冊一冊の書名は省略〕

一方清朝政府も、季盛鐸、劉延という二大臣の建議により、石窟中に残っ

ている古文書全部を北京に運び、1910年10月にはその解読のために京都から中国学者五名を招聘することを決議した。運搬の途中、数多くの文書が紛失した。先の二大臣の責任が問われたが、清朝末期の混乱そして辛亥革命の勃発によって、二人はこの不名誉な告訴からかうじて免れた。蒐集品は殆ど——七割まで——が仏教関係で、現在は北京図書館に保存されており、許国霖によれば、約9871点を数える。目録に関しては、非常に簡略なものが一つ出版されているだけである（陳垣『敦煌劫餘録』、北京、1931）。

ロシアのインド学者セルジュ・オルデンブルグ（Serge d'Oldenbourg, 1863-1934）は、その第二回中央アジア探検（1914-1915）の際、現地で購入したり、或いは石窟の土を掘ったり（？）して、ほぼ1万点に上るととてもなく豊富な収穫物をものにした。既に数年来予告されている探検日記が出版されれば、この蒐集品がどのようにして収集されたのかが更に詳しく分かるだろう。この蒐集品の存在が東西の中国研究者に知られたのは、1960年モスクワで開催された国際東洋学会議の折であった。それ以後メンシコフ（Men'sikov）の指導の下で、ソビエトの若手中国学者研究班により、レニングラード科学院アジア民族研究所所蔵の敦煌文献のりっぱな目録が第二冊まで出版された（*Opisanie kitaiskikh rukopisi Dun'huanskogo fonda Instituta narodov Azii, Moscow*, I, 1963 ; II, 1967）。

Ⅱ. 蒐 集 品

ロンドン、パリ、北京、京都、レニングラードの大コレクション、それに数の上では劣る幾つかのコレクション（殊に日本のもの。ヨーロッパで最も重要なのは、13点を数えるコペンハーゲン王立図書館）を合わせると、全体としてその価値はこの上なく貴重なものとなる。1909年12月10日ソルボンヌの大講堂で催された厳粛な歓迎会で、ペリオはそれを次のように語っている（*BEFEO*, X, 1910, pp. 272-281）。

「私がどれ程感動したか、皆さんの想像に難くないでしょう。極東の歴史上かつてなかった、漢文写本の一大発見だったのです。……漢文古写

本というのは、中国でも非常に稀しく、ヨーロッパには今まで一点もなかったものです。それ故、我々は今まで書物を通じてしか研究できず、刊行を目的として書かれたのではない文献は全く利用できなかった。これから、中国学者もヨーロッパ史研究者と同じように、古文書研究ができるようになるだろう。」

ペリオの言うとおり、中国ではゲーテンベルグに七世紀も先立って印刷術が発明され、その結果写本は消え去ってしまったからだ。ちなみに、この敦煌の蔵書窟の中から、木版印刷の最初期のもの数点が見つかっている。

敦煌からの発掘品は膨大な量にのぼるが、何といたっても大量の古文書と、今まで知られていなかった俗語で書かれた俗文学の発見が、敦煌文書がもたらした最も重要なものであろう。

古文書は、大きく次の三部類に分けられる。

- 1) 公文書：詔勅、布令、任名状（告身）、陳情文、覚書、それらは、中国の一辺境ではあるが重要地点である敦煌を通じて、中国中世史の研究に新しい光を投ずるものである。
- 2) 寺院の古文書：受戒牒、会計通帳、契約書（貸借・買売）、寺院内回覧状、寺院規則。
- 3) 個人に関する古文書：書簡、契約書。これらは、法制・経済史にとってかけがえのない資料である。

那波利貞氏の研究に引続き、ジャック・ジェルネ（Jacques Gernet）氏の博士論文『五一十世紀中国社会に於ける仏教の経済的側面（*Les aspects économiques du bouddhisme dans la société chinoise du Ve au Xe siècle*）』（Saigon, 1956）が、この類の文献を約100点紹介している。

俗語俗文学に関しては、ポール・ドミエヴィル（P. Demiéville）氏が10年（1951-1962）余にわたってコレージュ・ド・フランス（Collège de France）での講義をその解説に当てられた。中国・日本の学者は、近代の文学の前触れを告げ、その下地となったこの文学に非常な興味を抱いている。

ポール・ドミエヴィル氏は、既にこの種のテキストを幾つか翻訳出版して

いる。饒宗頤・ポール・ドミエヴィル両氏により、国立科学センター (Centre National de la Recherche Scientifique, 以下 CNRS と略) で目下出版準備中の『敦煌曲 (*Airs de Touen-houang* (*Touen-houang-k'iu*), *textes à chanter du VIIIe-Xe siècle*. Mission Paul Pelliot, documents conservés à la Bibliothèque nationale, II)』は、敦煌で発見された詞〔子〕曲を扱ったものである。

大きな興味の中心となるのは以上の二群の文書であるが、パリの蒐集品には、その他にも五一十世紀にかけての極めて多種多様な文献が含まれている。即ち、民間教育論、初等教育教本、辞書、古典、史籍、地誌、仏典、道経、そしてマニ教典の一断片等である。七世紀の道教經典で、今まで知られていなかった『本際経』の断卷は CNRS によって出版されている (Wu Chi-yu (呉其昱), *Pen-tsi king* 本際経. *Livre du terme originel*. Mission Paul Pelliot, documents conservés à la Bibliothèque nationale, I, Paris, 1960)。

また、書物の歴史に関して重要な文献も見出される。長い間、書物の材質の一つであった蠟が塗られた絹の巻物、絵巻物 (1954年ヴァンディエ・ニコラ (Vandier-Nicolas) 女史によって出版された『舍利弗と六師外道』、『観音経』、『地獄十王経』など)、拓本——その内の一つは現在知られている最古のものである——中国の大発明の一つである木版印刷初期の刷絵や版本等々。

大部分の写本の材質である紙は、又一つの研究対象であり、既にクラパートン (R. H. Clapperton) の研究 (*Paper. An historical account of its making by hand from the earliest times down to the present day*. Oxford, 1934) があるが、まだまだ研究の余地がある。大英博物館所蔵の文献中、405年から991年の年号をもつ紙を調査したクラパートン氏によれば、パルプの成分は楮 (*broussonetia papyrifera*) の樹皮繊維であるか、或いはそれと真麻の樹皮繊維との混合物かである。我々の要請で、CNRS の研究員であるフランソワーズ・フリデー (Françoise Flieder) 女史が、パリの文献の修復の際に剥がされた、かなり後代の紙を試料として、1967年に顕微鏡検査した結果も、同じく楮の繊維が圧倒的であるという結論に達している。

Institut für Cellulosechemie mit Holzforschungsstelle der Technischen

Hochschule Darmstadt 所長ジャイメ (Ing. Georg Jayme) 教授はボンのマイゼツァル (Meisenzahl) 博士を通じて、我々の蒐集品中チベット語文献 8 点と、中国語文献 13 点 (これはフリデール夫人もすでに調査したもの) から剥がされた紙を顕微鏡分析する許可を 1960 年以来得ていた。彼の指揮下で行われたこの分析の結果は、ジャイメ博士の七十歳祝賀の際に、‘Mikroskopische Untersuchung einiger früher ostasiatischer Tun-huang-Papiere von Marianne Harders-Steinhäuser’ と題して、『紙 (*Das Papier*)』誌 (23 (4, 5), 1969 年 4, 5 月号, 210-212 頁, 272-276 頁) に発表された。この非常に進んだ分析は、楮の繊維が圧倒的であることを示しているが、同時に沈丁花、大麻或いは真麻、さらには布をほぐした細い繊維も加えられていることを発見している。調査した紙の中には、ほぐした布の繊維だけで漉かれた紙は一枚もなかった。ほとんどすべての紙は、米の糊を使ってむらなく厚目に礬砂引きした跡がある。しかし、楮繊維だけで出来た紙は、その樹液の特性によって礬砂引きをしなくても墨がのるものである。

藤枝晃氏は上引論文の中で、八世紀末まで上質紙のパルプは、大麻布をほぐした繊維で出来ており、他方九・十世紀の行政文書は、楮の樹皮繊維で出来た紙に書かれていると主張している。

更に組織的に見本採取・検査することによって、この問題は一層究明されるであろう。安祿山の乱が引き起こした混乱と、チベット人の占領支配によって、中国本土から敦煌への紙の供給が跡絶えたために、八世紀中葉までは非常に上質であった紙が、以後質が低下していったことは、ちょっと文献を調査しているだけで見てとれる。薄くて、すべすべとして、強靱で粘りがあり、透かし線の間隔が狭かったのが、厚手で、むらがあり、張りがなく、荒くなり、透かし線の間隔も広いものとなっていった。

五世紀から 993 年 (蒐集文書中最後の年号) までの文献は、紙の端と端とを張り合わせた、多かれ少なかれ長い卷子本の形をとっている。紙葉の寸法は、〔縦〕1 (中国) 尺 × 〔横〕1 (中国) 尺半 或いは 2 (中国) 尺、即ち極めて大まかであるが 26×39cm, 26×52cm か 30×45cm (公式文書用) である。

というのは三世紀には26cmであった一尺の長さが、唐代には30cmに変わっているからだ。

もっと寸法の小さい卷子も幾らかあるが、まれである。紙はしばしば、虫よけのために色が滲み込ませてある。雄黄、或いは硫化水銀が使われており、そのために紙は非常に特徴のある緑がかった黄色をおびている。

一般には、紙は折り目、針穴、或いは墨で罫線が引いてあり、行の高さは18-19cm、幅〔間隔〕は1.5-1.8cmである。表紙はもっと厚手の紙、或いは二枚合わせの紙でできており、その端は竹や木のひご、或いは穀類の茎で補強してある。卷子のとめは、絹布（タフタ、サージ）を縫って作った紐、或いは数色の絹糸で織った紐で出来ている。軸棒は、一番内側の紙の両角を斜に切って、そこに糊づけされている（図1）。軸棒の両端には、しばしば褐色、紅、黒、紅・黒の塗料又は漆が塗ってある。中にはトルコ石や真珠貝を象眼し、美しく細工がほどこされたものもある。



図 1

卷子は十巻ごとにまとめられ長方形の帙に包まれていた。帙の長さは、まちまちであるが、高さはほぼ30cmである。帙は、細い竹ひごを絹糸で文様を入れながらつなぎ合わせたものか、あるいは緞子で縁どりされ、刻糸で補強された絹タフタで出来ている。藤枝晃氏は上引論文の中（p. 19）で、奈良の正倉院御物の中にある、30cm×50-60cmの数品以外には、完全なものを見たことがないと述べている。ところが、ギメ美術館には敦煌出土のりっぱなものが5点所蔵されている。内、3点は竹ひご製（EO 1200, EO 1208, EO1209）、2点は絹製（EO 1207, EO 1199）である。分類番号 EO 1208は、両端が各々約3mm幅の平たい竹片4枚で補強されていることから、完全な形

を留めていると思われる。漢字が書かれ、印が押してある紙で全体にわたって裏打ちしてあり、寸法は29×43.5cmである。絹製の2点も破損のないものである。EO 1207 (28×55.5cm) は一枚のページ色をした長方形の絹タフタでできており、黄緑色をした厚い絹紬で覆われた紙でもって裏打ちしてある（つまり3重になっている）。冒頭部は平たい竹片で補強されている。裏打ちしてある側の中程真ん中に、広幅の紐が縫い付けてある。全体にわたって、厚ぼったい斜文織絹錦の広幅の帯で縁どりしてある。又全体を端から端まで並行に横切る非常に美しい刻絲の帯二本で飾りがつけてある。EO 1199 (28×46cm) も EO 1208 と同じ形式であり、同じく完全なものである。ただ違うのは、一方の端に、縁どりと同じ斜文織錦の広幅の三本の帯が、巻いたり、締めるのを容易にするために三角形にとりつけてあることだ（図2）。

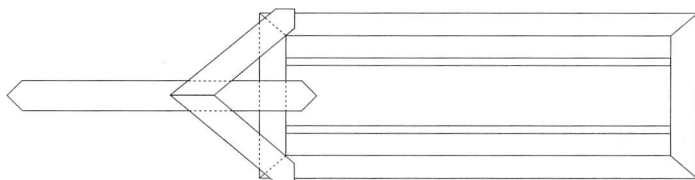


図 2

ギメ美術館にある絹布の断片，卷子の帙，国立図書館にある中国・チベット部門の幾つかの文書の絹紐，表紙に関しては，ハラーデ（M. Hallade）女史の協力を得て，ガブリエル・ヴィアル（Gabriel Vial）氏とクリシュナ・リブ（Krishna Riboud）女史が研究している。その研究成果の第一冊が、『敦煌の布』（*Tissus de Touen houang*）と題して最近出版された（Mission Paul Pelliot, Documents archéologiques publiés sous les auspices de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, XIII, Paris, 1970）。これは蒐集品の中にある布織物の組織に関する研究であり，続いて出版される二冊では，資料の複製と組織的叙述がなされる予定である。

パリの蒐集品中には，卷子から「旋葉（アコーディオン）型」といわれる折本，或いは「蝴蝶型」といわれる綴本へと変化してゆく初期の見本が存在し

ており、それらは中国の本の歴史を物語っている。チベット支配期の敦煌では、サンスクリット本の形式である貝葉形も存在していた。

敦煌文書の発見により、筆跡研究も可能になり、この方面では藤枝晃氏が京都で出版される豪華な図版を伴った雑誌『墨美』の中で、りっぱな研究の先鞭をつけられた。

パリの蒐集品は、更に多岐にわたる発見をもたらしうる。未知のテキスト、首都からはかけ離れたこの地方での、数世紀にわたる話し言葉の研究、特徴ある筆跡。それらも、各々が一つの独立した研究対象となるものである。この宝庫の調査は、詳しい目録と索引ができて始めて可能となるであろう。我々は遅々としてではあるが、それらを準備中で、既にそのための資料は豊富に集められている。

Ⅲ. 目 録

ペリオによる最初の目録

1909年に帰国してから以後数年の間に、ペリオは敦煌中国語文献の略述を作成し、それを自分で二重或いは一重のルーズリーフに書きつけた。足つけされ次いで製本されたこのノートは、灰色表装の大きな帳簿となっている。1945年にペリオが亡くなった後、残された書稿の中から見つけられた3512から3592番までの略述が、それにつけ加えられた。ペリオのこの仕事は第一次大戦終了後、1920年に仕上げられたようである。この帳簿は一般には公開されておらず、東方写本部閲覧室の目録中に供されているのは、エドガー・ブロシェ (Edgard Blochet) 氏による写し——完全ではない——である。

この略述は、1点につき1行から10行程の非常に短いものである。テキストの重要性、年代、筆跡の特徴、写本の質に関しても、しばしば評価が加えられている。また「写真撮影済」「要写真撮影」「要出版」「要修復」といった註がところどころにつけてある。その稀少さ或いは美しさから特別貴重な写本、版本は4500-4516の番号が打っており、これらには略述の後に「Réserve」(貴重本)と付記されている。

ペリオが作成した目録は、2001番から始まっている。誰もが訝しがる所以であるが、その理由は、ペリオはこの最初の2000番をチベット語文献（分類番号 Fonds Pelliot tibétain）——当初はジャック・バコー（Jacques Bacot, 1877-1965）氏がその目録作成の任にあたっていた——用にとっておきたかったのだ。しかし、この2000番では結局足りなくなってしまった。というのは、1961年に出版されたマルセル・ラルー（Marcelle Lalou, 1890-1967）女史の『国立図書館所蔵敦煌出土チベット語文献目録』（*Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-houang conservés à la Bibliothèque nationale*）第三冊は2216番で終わっており、まだ未整理文献も残っているからだ。

ペリオの中国語文献目録の最終番号は5544番であるが、その途中には欠番がある。後述するように、そのうち幾つかは既に埋められた。それでもまだ4100-4499, 5044-5521番と二ヶ所大きく穴があいている。

この二つの大きな欠番群の外にも、ペリオ目録では、数百の文献に関しては全く叙述がなされておらず、また300以上ものテキストが同定・識別されていない。

二ヶ国語で書かれた文書、殊に中国語・チベット語、中国語・コータン語で書かれた文書は、Fonds Pelliot chinois（中国語）の中に入れられている。他のものは数の上では少ないが、或いは Fonds Pelliot chinois（中国語）に入っているか、或いは Fonds Pelliot sogdien（ソグド語）、Fonds Pelliot sanscrit（サンスクリット語）、Fonds Pelliot kouchéen（クチャ語）、Fonds Pelliot ouïgour（ウイグル語）の中に入っている。

ペリオが作成したこの中国語文献目録は、部分的に中国語に訳されている。
——羅福萇：「巴黎圖書館敦煌書目」『国学季刊』新シリーズⅢ-4, 1923
——陸翔「巴黎圖書館敦煌寫本書目」『国立北平図書館刊』Ⅶ-6, 1933 及びⅧ-1, 1934

北京図書館は、パリの蒐集品中相当数の写真を所持している（王重民『敦煌遺書総目索引』（北京、商務印書局、1962年）後記（543頁）によれば、ほぼ9割近い）。王重民氏は1934-1939年にわたってパリ国立図書館に滞在したが、

写真とマイクロフィルムの撮影は、1937年以後彼の指示の下に行なわれた（袁同禮「北平図書館が所有する海外所蔵敦煌写本・マイクロフィルム総合リスト」『国立北平図書館館刊』新シリーズⅡ-4, 1940, 後記）。

——那波利貞、（当時）京都帝国大学文学部教授によるペリオ目録の補遺

これは、那波教授が1932-1933年にわたるパリ留学の後、残しおかれたフランス語で書かれた簡潔なノートである。3511番から5541番に及ぶものであるが、欠番も数多くある。

——王重民目録

氏は当時北京国立図書館司書であり、1934年から1939年にわたって交換司書としてパリに来了。五年に及ぶ研鑽の後パリを離れる際、このすぐれた書誌学者は——それ以後北京国立図書館長に就任——2004から2488番までのノートをパリに残していった。しかし、それ以後の番号については、そのノートの原稿（フランス語は訂正済み）を持ち帰った。氏はその後ワシントンの議会図書館（Library of Congress）に滞在したが、そこでは書誌学的研究に多忙を極めたため、1946年になってパリに送り届けられてきたのは、かなりの欠番を含んだ2480-4099, 4526-4649番に及ぶノート原稿の複写だけであった。

彼のこの仕事は、後に中国語訳され、補足されて出版された（王重民『敦煌遺書総目索引』北京 商務印書局 1962年, 253-313頁）。この索引は2001から5579番について叙述しているが、4100-4499, 5044-5521番は欠番であり、後続番号の内にも欠番が28ある。より詳細な叙述は、2分冊にして出版された（王重民『巴黎敦煌残卷叙録』北京国立図書館 1936, 1941年）。これら叙述の大部分は、他のノートと一緒に、王重民『敦煌古籍叙録』（北京 商務印書局, 1958）の中に再録された。

蒐集品がペリオによって国立図書館に納められた記念すべき時、ペリオの要請により又写本部主任司書アンリ・オモン（Henri Omon）氏の仲介もあり、

卷子の汚れを落とし、皺を伸ばし、修復したのは、ルーヴル博物館の修復係員たちであった。それ以来、国立図書館修復作業場が拡張されたために、王重民氏は幸いにも修復係員と共に直接作業に参加する好機を得た。このようにして、多数の文献が一旦解組され、次いで復元されたのである。敦煌に於いて紙が極度に欠乏していた時に、使用済みの紙面を背中合わせに貼り合わせて、新たな書写面をこしらえ、その上に書かれた文献がある。こうした文献は、再び剥がされ、両面ともに判読可能になった。また、使用済みの紙で、補強・修理のために他の文書に貼られていたものも剥がされた。その結果、写本の紙は増加した。

こうして4100-4499, 5044-5521番の二つの大きな欠番群を除いて、大部分の欠番、殊に4691-5043番は王重民氏によって補われた。又、氏により5545-5590の46番、我々によって5591-5596の6番と、新しい番号も追加された。こうして剥がされた断片は、全てに独立番号が付けられているわけではなく、しばしばある一つの「親」番号の下に「子」番号、「孫」番号を付け加えて整理統合してある。今後の研究により、これら文献間の相互関係が新たに判明すれば、その結果番号の変更もありうるであろう。

——ハーバード大学楊聯陞教授作成フランス語ノート

1951年の短期滞在の折、氏は5543-5590番までの写本に関するノートを我々に残して置いて下さった。

修復作業が更に進んで、被い隠されているテキストを取り出すべく、元来補修のために貼られた紙片を剥がすことが可能になった時点で、番号に新たな系列が設けられた。これら断片にはすべて、その由来する文献の番号が打たれ、その後「断片 (pièce) 1」, 「断片 (pièce) 2」等と附記された。(例えば2161番参照)

数の上から見た Fonds Pelliot chinois の現状は以下の通りである。

2001-4099番

2099

4100-4499番	欠番
4500-5043番	544
5044-5521番	欠番
5522-5596番	75
4514, 4517, 4518の三番だけで、71の〔子〕番号が付けられた167 の文献がまとめられている	167
次の21の番号（4525, 4690, 5023-5025, 5028, 5029, 5031, 5546, 5557 <i>bis</i> , 5561, 5578, 5579, 5581, 5582, 5584, 5586-5590）には315の写本 断片がまとめられている	315
取り剥がして得られたもので、その由来する写本の分類番号の下に 「断片」（ <i>pièce</i> ）として分類されているもの	約700
	計 3900

この数字は、新たな剥収作業、断片相互の関係、また今後の研究の進展に
ともなって起こりうるその他の修正によって、訂正されるべき性格のもので
ある。

——ジャック・ジェルネ（Jacques Gernet）・呉其昱目録

こうした膨大でまとまりのない資料全体にたいして、一貫した脈略のとれ
た完璧な目録を作成するために、当時 CNRS 研究員であったジャック・ジ
ェルネ氏（現在はパリ第七大学教授）と、同じく CNRS 助手呉其昱氏（現
在は CNRS 研究員）の二人が動員された。両氏は1952年より1955年につ
けて、2001-2500番に及ぶ目録の第一分冊のタイプ打ち原稿を整理・仕上げた。
この業績は学士院金石芸文部門から表彰を受けた（1957年度予算賞）。

——現目録

国立図書館の目録規準に準じて、写本の物質的側面を詳細に叙述するた
めに、1955年以来2001-2500番に関して補足的研究作業が始められた。その結

果、多くの文献間の新たな相互関係が明らかにされ、又同定・比定がなされた。この研究は、私の指導の下で国立図書館東方写本部司書マリ＝ローズ・セギー（Marie-Rose Séguy）女史が担当し、1967年からは、CNRS 助手エレーヌ・ヴェッチ（Hélène Vetch）女史の協力も得て、満足すべき結果が得られた。呉其昱氏もこの作業に加わった。1955年以来ペリオ将来の中国語文献の目録作成の任に当たっている碩学左景樞氏（CNRS 助手）には、修復文献から剥がされた断片の識別をしていただいた。半世紀来、殊に日本と中国で出版された敦煌中国語文献に関する夥しい専門研究の参考書誌を追加するために、相当の時間が費やされた。というのは、しばしば入手困難な出版物を集め、調べる必要があったからだ。

又、組織的な表及び索引は、セギー女史の責任編集にかかり、本冊使用のためのみならず、続巻の作成のためにも、その有益性はここに強調するまでもない。

この第一分冊の出版を遅延させてしまった一因は、文献の厳密な叙述をしたことに帰せられる。がしかし、敦煌出土文献が、パリ、ロンドン、北京、レニングラード、京都、台北の図書館、その他雑多なコレクション中に四散されてしまっており、同一文献の断片が世界の四隅のどこかで見つかるかも知れないと考えれば、それは必要且つ緊急な作業であった。

困難な状況の中で、とりわけ国立図書館館員は東方写本部の創設・装備、又夥しい写本・刊本蔵書の整理に忙殺されながらも、全員が本冊の作成に協力した。きめ細かい指導を受けた国立図書館の修復女史の皆さんは、マルセル・ラルー女史が「閲覧者によっては、興奮を覚える人もいるであろうが、中には尻込みしてしまう人もいる、塊」^③と形容した文献の山を前に、ばらばらになったテキストを復原し、整備するのに努力を惜しなかった。

追って、本冊の続巻が5ないし6冊出版される予定だが、そのための豊富な資料はすでに準備されている。^④又、東京の立正大学法華経研究所図書館長兜木正亨氏、及び京都の龍谷大学井之口泰淳両教授は、各々1967年、1969年のパリ滞在中に、それまでいかんとも同定しかねていた数百に及ぶ断片を識

別して下さった。ここに記して謝意を表する。久しく学界より待望されていたこの研究成果の出版を可能ならしめて下さったサンジェル・ポリニャック (Singer-Polignac) 財団、とりわけ財団理事長ロジェ・ハム (Roger Heim) 氏及び理事ジュリアン・カン (Julien Cain) 氏の寛大な援助に対して、ここに感謝する次第である。

1970年10月

東方写本部司書

マリ＝ロベルト・ギニャール

(Marie-Roberte Guignard)

訳註

- ① 敦煌がチベット占領支配に陥った年代は、最近の研究では786年という説に固まりつつある。呉其昱 (伊藤美重子訳) 『敦煌漢文写本概説』 (『講座敦煌 5 敦煌漢文文献』 東京 大東出版社 1992年 106-111頁)
- ② 敦煌蔵書窟 (第17号窟) の発見の年代に関しては、王圓録自身の記録に基づいて1900年とするほうが正しいであろう。呉其昱氏上引論文7頁。
- ③ マルセル・ラルー 『国立図書館所蔵敦煌出土チベット語文献目録』 (*Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-houang conservés à la Bibliothèque nationale*) I, 1939, p. v からの引用。
- ④ 続巻は、第3巻から第5巻までが出版されている。

第3巻 3001-3500番 1983

第4巻 3501-4000番 1991

第5巻1冊 4501-4734番 1995

第5巻2冊 4735-6040番 1995

この3巻4冊は、すべてミシェル・スワミエ (Michel Soymié) 氏を代表とする CNRS の敦煌文献研究班の共同作業・執筆によるものである。第1巻の編集方針に従い、巻を追うごとに更に叙述も詳しくなり、巻末の索引も整備された。敦煌文献の目録としては、一つの手本的業績である。エレヌ・ヴェッチ (Helène Vetch) 女史により準備されている、2501-3000番の文書を扱う第2巻がまだ未完で、その刊行が待たれる。

訳者あとがき

既に30年近く前に出版された目録の序言の日本語訳を、今さら発表するなどとは、と思われる方もおられるであろう。事実、この目録が出版されてからの敦煌文献研究の進展には目覚ましいものがあり、旧知は刷新され、新しい知識も増えた。それにもかかわらず、この序言はその価値を失ってはいないであろう。一つには、敦煌学の発展はこの目録（続巻も含めた）の出版に負うところが少なからずあると思われるからである。ギニャール女史自らが記しているように、この目録の第一分冊は出版を遅延させてまで、国立図書館東方写本部の専門司書が司書学的見地からも満足のゆく文献の厳密な叙述をなした。そしてそれは「敦煌出土文献が、パリ、ロンドン、北京、レンングラード、京都、台北の図書館、その他雑多なコレクション中に四散されてしまっており、同一文献の断片が世界の四隅のどこかで見つかるかも知れないと考えれば、必要且つ緊急な作業であった」この方針は、全巻を通じて守られており、この目録が「手本」と評価される一因でもある。

その意味で、ギニャール女史の序言は、司書の立場からの見方をも反映しており、興味深い。何よりも、敦煌文書が1910年に国立図書館に納められてからの目録編纂の過程が手際よくまとめられている。更に注目されるのは、彼女の司書としての、収集品の評価である。一口にロンドン大英博物館のスタイン、パリ国立図書館のペリオの敦煌二大コレクションと併称されるが、彼女の意見はそうではない。このことは、両コレクションの比較研究が進むにつれて、一層明瞭になりつつある。スタインの収集作業に関して、ギニャール女史はこう述べている。「ハンガリー系英国人探検家オーレル・スタインが、インド政府及び大英博物館の援助のもとに行った第二回中央アジア探検（1906-1908）の際、外国人としては最初にこの石窟に立ち寄った。彼は発見品の一部——最も貴重なものではないにしても、最も見栄えのするもの——を購入した。彼は考古学者でこそあれ、中国学者ではなかったのである」事実、スタインはこの蔵書窟に3日しか過ごしておらず、まさに発掘品

の中から、もっとも見栄えのするものを持ち去ったといった感を拭いきれない。文書の内容は、論外のことであったろう。

一方ペリオの態度は、スタインとは好対照である。敦煌からエミール・スナールに宛てた手紙が、何よりも雄弁にそのことを物語っている。ペリオは膨大な写本の山を前にし、その言語、年代等を3週間程の短期間に驚くべき早さで、驚くべく正確に把握していた。その上で、最も重要なものを選びすぐってパリに将来したのである。さらに、こうした写本研究に当然必要となってくる漢籍刊本も入手している。

両者が持ち帰ったものの間に、色々な意味で相違があるのは当然であろう。スタインの選択基準に、全く文献的考慮が払われていないことは、いくつかの例から明らかである。訳者の専門であるチベット文献の例を挙げると、まず『年代記』が挙げられる。全体で306行を残すこの文書は、古代吐蕃帝国のツェンポの動きをはじめ重大事件を紀元650年少し前から、747年までの1世紀余にわたり一年一年記録した、古代チベット史研究にとって最も重要な文書の一つである。ところが、この文書は後半（52行以後）がスタインコレクションに入っており、冒頭の51行がペリオコレクションに入っている。しかも、51行は刃物のようなもので切られた形跡があり、下部の母音記号の一部はスタイン文書の冒頭に鮮明に残っている。両文書を突き合わせてみると、ぴったりと合う。元来この両文書は一連の卷子であり、それがあつた時、何らかの理由で二つに切断されたのであろう。スタインは、破損している冒頭部分は残して、保存状態の良好な部分だけを持ち帰ったのであろう。スタインに遅れて敦煌に立ち寄ったペリオは、自ら「ともかくも肝心な点の一つとして忽せにしなかったと思う。一つの巻物として、そればかりか一片の紙切れにいたるまで——そんなぼろは、それはもう歴大な量に上るものだったが——私が手にとらなかつたものは何一つなかつた」と述べているように、この残りの冒頭が破損した51行しかない断巻を、重要と判断して持ち帰ったのであろう。

もう1点挙げると、現在 Pelliot tibétain 16 番および Poussin 目録751番

の番号が打たれて、パリとロンドンに分かれている文書がある。全体で20葉の貝葉形の写本である。22葉から41葉までの通し番号が打ってあることから、本来一つの文書であったことは疑いがない。先に手にしたスタインは、見本として8葉(34-41)を持ち帰り、残りは置いていったのであろう。スタインに遅れて蔵書窟に入ったペリオは、残っていた12葉(22-33)全部を持ち帰った。

こうした例からも、ペリオの中国学はもちろんのことチベット学における炯眼の程が窺えるであろう。

この序言の日本語訳は、目録出版から間もない1971年に既に用意したものである。それは、当時コレージュ・ド・フランスの助手をしていた訳者にはとても高価で入手できなかったこの目録を恵贈してくださった、当時大谷大学大学院に在籍中の栖川隆道氏へのお礼の意味を込めてであった。今その訳稿に少し手を加えて、原文に最小限の補足、訳注と、図を添えてここに発表することにした。この目録出版以後の、その他の目録、研究書は枚挙にいとまがなく、別な文献目録が必要であろう。当面のところ、各地に所蔵されている敦煌文書の目録に関しては、以下の2点が参考になるであろう。

——呉其昱(伊藤美重子訳)「敦煌漢文写本概説」(『講座敦煌 5 敦煌漢文文献』東京 大東出版社 1992年 9-15頁)

——Yasuhiro Sueki, *Bibliographical Sources for Buddhist Studies, Bibliographia Indica et Buddhica III*, Tokyo, International Institute for Buddhist Studies, 1998, pp. 47-51: 'Tibetan Buddhist Texts from Tun-huang'; pp. 100-114: 'Chinese Buddhist Texts from Tun-huang'.

フランスの国立図書館およびイギリスの大英図書館の好意により、大谷大学図書館にはペリオ、スタイン両コレクションのマイクロフィルムが一括して揃うことになった。今後の積極的な活用のために、この訳が一助になれば幸いである。

(1998年10月21日)